Japanese Literature Association

本多朱里著『柳亭種彦——読本の魅力』

木越俊介

近年、種彦読本について精力的に追究してきた本多氏の研究成果が一書にまとめられた。著者自身「はじめに」で述べるように、種彦は『偐紫田舎源氏』をはじめとする数々の合巻の名作を手がけていることが、かえってそれ以前の読本作品群を見えにくくさせてきた。こうした状況に対し、著者の持ち味である丁寧な調査と読解を基本として種彦読本の魅力に迫ろうとしたのが本書である。具体的には、種彦の読本全八作についての執筆時期の整理や、とりあげる作品の諸本についての可能な限りの調査、さらには各作品の梗概や人物関係図（これらは種彦作品にとどまらない）を示すなど、作品解題を軸足としながら論を展開している。また先行研究での事実誤認等も逐一訂正するなど、基礎作業の積み重ねが着実に実を結んでおり、本書によって種彦読本の研究水準が一気に数段上がったことは言うまでもない。

以下、種彦の処女作『近世怪談霜夜星』を論じた第二章から順に触れていくことにしたい。ここで著者は、当該作が「時間軸に沿って事件が語られず、過去の話題と現在の話題が交錯することから、話の運びの悪さが目立」ち、その内容も「『四谷雑談』にその多くを負っており、目新しい展開もない」（三十九頁）と認めている。しかしだからといって駄作と切り捨てて事足れりとすることなく、作品を虚心に検討しその特色を見極めていく。すなわち、典拠である実録『四谷雑談』との差異に注目することで、その「内容をほぼ忠実にベースとして用い、ここに、当時有名であった累伝承を付加し、全体に〝水死のイメージ〟を強調した作品」（五十一頁）と位置づける。さらには京伝読本、具体的には『安積沼』や『曙草紙』から「多くの趣向を得ている」（六十一頁）こと、特に『安積沼』と『霜夜星』との間には、部分的・表層的な趣向にとどまらず構成面での類似、影響関係が見出されるという指摘は重要である。

続く第三章では主に『浅間嶽面影草紙』について論じ、特に京伝『曙草紙』からの影響関係を指摘する中で「女性を前面に出して描く」（一一三頁）特徴を見出している。書評からややそれるが、この『面影草紙』には所々に音曲の詞章などが見られる。これらはおそらく種彦自身による考証と深く関わっているはずで、評者は井上啓治氏が『京伝考証学と読本の研究』（一九九七）で示したような方法が種彦読本にも有効だろうと考えつつも、具体的な切り口を見いだせないままでいる。また、私見では本作発端部や人名は『室町殿物語』巻九・十二（『室町殿日記』巻十八）に拠っており、典拠レベルでもまだまだ解明すべき点が多く残された作品であろう。

「種彦読本の演劇的特徴」と題された第四章は、「演劇的特徴」という従来の指摘を踏まえ、作品につきながら具体的に検討していく。その過程で、『綟手摺昔木偶』が「近松を中心とした浄瑠璃作品」（一三六頁）を強く意識している様相を追い、さらに表現面での演劇色にも触れる。これは後に馬琴から批判を受けた点であるが、同じく京伝（『双蝶記』）も同様の批判を受けており、氏はむしろそこに改めて種彦と京伝の作風の共通点を見出している。このように、

NII-Electronic Library Service

Japanese Literature Association

従来漠然と種彦読本は京伝読本の趣きがあるとされてきたが、氏により本質的な面での両者の影響関係を示す具体例が次々と提示されたことによって、江戸読本史の中の一つの系譜としてはっきりと位置づけられたと思う。これに加え興味深かったのは、本章第四節において、種彦読本の全ての作品について「演劇的要素」の有無・濃淡を洗い直した点である。著者は単なる印象でもって「演劇的」とするのではなく、自己の定義に基づいて客観的に点検していく。その上で執筆時期による変化を指摘しその原因を探求する（ただし原因についてはやや説得力に欠ける）。さらに、「種彦初期の半紙本読本は、演劇よりも実録体小説を種として作られている」（一四七頁）という文化期の江戸読本史を考える上で極めて興味深い指摘がなされている。

さらに第五章「転換期の種彦」では、『勢田橋竜女本地』に触れつつ、北斎やその弟子と思われる酔月壺龍等の絵師と書肆・西村屋与八との交流を日記などの資料から跡付け、そこに「転換点」を見る。ただ西村屋与八の存在については、佐藤悟氏「地本論」（一九九八）における指摘を踏まえれば、『勢田橋竜女本地』論そのものにもう少し奥行きが出たのではないだろうか。

最終章「読本から合巻へ」は、種彦が合巻へと活躍の場を移したことを、外在的な要因も含めて江戸読本全体の流れから把握したもの。おそらくこの最終章と第一章は、本書（のもととなった学位論文）執筆に際して新たに付されたものと思われ（この点が即座に分りかねるという意味で、初出一覧を付していただければありがたかった）、これにより本書は結果的に、近世文学や読本の研究に直接携わらない研究者、さらに言えば江戸時代の文学・文化に興味を持ち始めた院生・学部生（著者自身がそうだったことは、微笑ましい「あとがき」に記されている）などをも拒まない研究書となっている。巻末に「柳亭種彦略年表」が付されているのも、研究書としての水準を保ちながらの行き届いた配慮であり、こうした開かれ方は見習うべきであると思う。ただし、最終章を一つの論文として見た場合、その労力に比して論証過程・結論ともにやや目新しさに欠けることは否めなかった。しかしこのことを差し引いても、本章が加えられることで全体が引き締まっていることは確かである。

最後に、本書は右に記した通り一書として見通しがよく、かつ細部に至るまで妥協のない点で、これからの種彦研究に不可欠な書となるであろう。これは著者の並々ならぬ努力のたまものであるのだが、その反面、「形」としてまとめる過程で様々な制約も伴ったのではないかと忖度する。そうした意味で今後は、本書で示された色々な可能性のさらなる発展とともに、著者の新たなる挑戦にも心より期待したい。

（二〇〇六年五月二〇日　臨川書店刊　二五二頁　二六二五円）

NII-Electronic Library Service